

岩出博先生を偲んで

責任編集者 加 藤 恭 子

岩出博先生に初めてお目にかかったのは1998年の夏の頃、会社を辞め、大学院を受験しようと商学部で研究生をしていた時でした。世田谷の住宅地にある商学部から見ると、経済学部はビルばかりの都会にあるせいか近寄りがたく、さらに岩出先生のお名前から想像する印象も少し堅いため、非常に緊張しながら研究室を訪問しました。しかし、笑顔で迎えてくださった先生は、ご自身も会社を辞めて大学院に入られたこと、ケンブリッジ大学に留学されていたことなどの共通点を気さくに話していただき、とても楽しい時間となったことを昨日のこのように思い出します。それ以降、先生の院生として、さらには同じ職場で働く者として20年もの間、幸運にも先生の傍にいたことができたが、いつも優しくサポートして下さる先生の姿は、初めて会ったあの日と変わることはありませんでした。

岩出先生の数多くのご研究の中で触れておきたいのは『アメリカ労務管理論史』です。それまで「労務管理」(personnel management)と呼ばれていたものが、1970年代頃から次第に人的資源管理(Human Resource Management)と呼ばれるようになったのはなぜか、を端緒とし、それまでほとんど未開拓であったアメリカ労務管理について発達史という形でまとめられたものです。その結果、人的資源管理は人間重視、つまり動機づけや従業員満足という理念を基礎としている点が、それまでの労務管理とは異なると結論づけられました。人的資源管理の研究は細分化され、調査研究が多い中で、人的資源管理全般の圧倒的な知識をベースに、包括的に分析されている点で唯一無二の研究であり、人的資源管理研究に大きな功績を残したといえます。先生はこの研究で博士号を取得、さらに経営科学文献賞も受賞されました。

そして、教員としての岩出先生も、学生への動機づけや満足感をいつも気にかけていらっしゃったように思います。こうした方が良いと上から押し付けたり、頭ごなしに否定したりしたことは一度もありませんでした。一方で、私が院生の時に文献のまとめ方に悩んでいたら、「これは参考になるかなあ」と遠慮がちに渡してくださったのが、先生ご自身が院生時代に文献ごとに詳細をまとめられていたノートでした。このように、いつもそっと助け舟を出してくださいました。

また、岩出ゼミでは、毎回のグループディスカッション、学生自らが目標を立て、1年間の自己評価を行う目標管理は、30年ぐらい前から導入されていたようで、これも学生たちがモチベーションを持って取り組めるようにという工夫だったと思います。このように研究以外にも学生のサポートの仕方やゼミ運営の理想的なモデルなどたくさん学ばせていただきました。結局、先生の研究室に伺う機会は院生時代よりも、教員になってからの方が増えたように思います。そして今でも、先生に聞きたい、相談したいと思った瞬間、それがもう不可能であることに気づき、悲しみを新たにしています。

今回、岩出先生の追悼号を出版するにあたり、外部からご寄稿いただきました専修大学教授廣石忠司先生、学内の小笠原先生、三井(泉)先生、西脇先生、そして同じく岩出先生門下の洪先生、高橋先生、本当にありがとうございました。私が声をお掛けしたというより、先生方からご執筆の声を上げていただき、これも岩出先生の生前のお人柄があってこそだと思います。また、『経済集志』の編集委員会の方々にも、この追悼文を載せる機会をいただきましたことを深く感謝いたします。

最後になりましたが、岩出先生のご冥福を心よりお祈り申し上げ、追悼の辞とさせていただきます。